

鶴山書院報

第18号

公益財団法人
孔子の里

〒846-0031
佐賀県多久市多久町
1843番地3 東原庫内
TEL 0952-75-5112
FAX 0952-75-5320

E-mail ko-si@po.taku.ne.jp
URL http://www.ko-sincsto.com

発行人
理事長 香月 正則

理事長就任挨拶



公益財団法人孔子の里
理事長 香月 正則
(多久市長)

この度、公益財団法人孔子の里の理事長に就任いたしました香月正則でございます。

まず初めに、前任の横尾俊彦理事長におかれましては、二十八年間にわたって理事長として本財団の活動にご尽力いただきありがとうございます。改めてその責任の重大さに身の引き締まる思いであります。

さて、実のところ、私が財団に関わるのはこれが初めてというわけではなく、公益財団法人孔子の里がまだ財団法人のころ、平成二十年から平成二十二年までの三年間、当時、連合佐賀多久小地域協議会で副議長を務めており、その縁で、財団理事として運営に関わっておりました。

改めて、多久市は豊かな自然と文化、そして温かい人々が共存する素晴らしい地域です。その中で、本財団は文化の面で特化して

おり、多久聖廟の歴史や文化、多久の偉人顕彰や文化講座、生涯学習、青少年育成などを主の事業として行っております。

春、秋には多久聖廟祭が三百年以上にわたり厳かに執り行われてきました。併せてこの伝統を守り続けていくために地域の児童生徒による腰鼓や釈菜の舞など地域の皆さまと一緒に文化を守っています。

また、国の重要文化財の多久聖廟をはじめ、周辺の史跡や歴史を保護し、守り受け継いでいくことを使命としています。この伝統歴史を多久市内だけではなく広く市外や県外を問わず国内外からでも来訪いただけるように更に磨きをかけることや、これからはSNS等も積極的に利用し広報にも努めてまいります。

これから健全な法人運営を行い、それを通じて、多くの皆さまに喜んでもらえる、そんな組織づくりに向けて精一杯努力して参りますので、今後とも、変わらぬご愛顧、ご支援、ご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。



〈特集〉

孔子の里ジュニアガイドの活動紹介……………2

佐賀城内の多久屋敷 佐賀県立名護屋城博物館 武谷 和彦……………4

『草場佩川日記』にみる陶磁器の産地と名称 佐賀県立九州陶磁器文化館 芳野 貴典……………6

龍造寺隆信歿後の龍造寺氏と多久安順 佐賀県立図書館 郷土資料調査・編さん課 野下 俊樹……………8

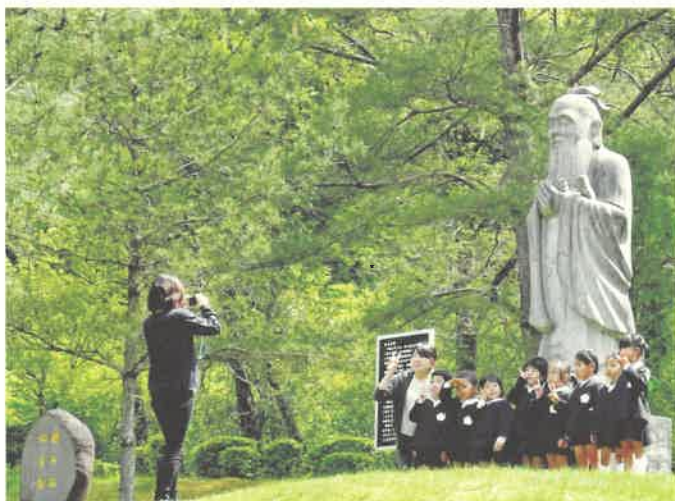
草場船山「蟋蟀之吟」(翻刻文紹介 其二) 草場佩川の会事務局 石丸 隆司……………10

大寶聖林碑はなぜ多久にあるのか? 公益財団法人孔子の里 理事 服部 政昭……………12

華表を仰ぐ 多久市郷土資料館長 藤井 伸幸……………14

来訪・来信・雑録・秋季釈菜のご案内 お火たき・初詣案内・編集後記……………15

多久の歴史と文化を学ぶ講座等の案内 多久の百景……………16



「記念撮影」(唐津市 川添廣満)
多久百景写真コンテスト審査員特別賞作品

ようこそ!多久聖廟へ



孔子の里ジュニアガイドの活動紹介



歴史と文化が息づく多久聖廟。この特別な場所を、ボランティアガイドの小中学生が元気にご案内します。多久聖廟の歴史や魅力を伝えるジュニアガイドたちの活動を紹介します。



孔子の里ジュニアガイド ってなに?

「朋あり遠方より来る また楽しからずや」皆様、ようこそお越しくださいました。」

多久聖廟を訪れた観光客に聖廟の歴史や敷地内にある石碑などを元気いっばいに案内しています。

孔子の里ジュニアガイドは、子どもたちの自主性を育てることを目的に設立。昨年20周年を迎えてこれまで活動に参加したガイド生は130名を超え、ガイドを聴かれた観光客の皆様からは多くの感動の言葉をいただいています。

どんなことをしているの?

まず入学した子どもたちは、3か月間で教本を勉強し、ガイドの案内を暗記します。難しい漢詩や論語を一生懸命勉強しガイドとしてデビューします。

現地でのガイドは、まず観光客への声掛けから始まります。ここでガイドを断られる場合もあります。かくじけずに声掛けをします。

ガイドが始まると元気な声で聖廟敷地内にある石碑や石碑などの観光スポットの案内を行います。案内する石碑は漢詩など原文で書かれているものばかりですが、これらをすべて暗記で説明します。1回のガイドは30分ほどですが、ガイドを聴き終わった観光客の皆様からの感謝の言葉はジュニアガイドたちの大きな励みになっています。

また、市外研修も実施しており、他の施設の観光案内事例も参考にガイドの研鑽に努めています。





好きなこと・好きなものは？

- ・読書。綺麗な景色を見ること（ここな）
- ・ゲームをすること（あやり）
- ・寝る。ジブリを観る。ピアノを弾く（あんな）



ジュニアガイドに入った理由は？

- ・楽しそうだったから（あんな）
- ・多久聖廟のことを知りたいから。友達が入っているから（りゅうのすけ）
- ・誰かに教えるというマナーを学びたかったから（ゆうしょう）
- ・ジュニアガイドをしてみたかった。楽しそうだったから（りょうすけ）



好きな論語は？

- ・威あれど猛からず。故きを温ねて新しきを知る（ほずみ）
- ・朝に道を聞かば夕べに死すとも可なり（たいせい）

ジュニアガイド案内箇所

- ①茂文像（多久四代領主・多久茂文公）
- ↓
- ②芝生広場（多久邑の学校東原庫舎跡）
- ↓
- ③孔子石像（曲阜市から贈られた像）
- ↓
- ④草場佩川漢詩碑（「山行示同志」）
- ↓
- ⑤孔子世系譜（孔子様の家系を刻んだ石碑）
- ↓
- ⑥発憤忘食の碑（孔子様の人柄をあらわした論語の一節）
- ↓
- ⑦仰高門（「仰高」は、顔子の語。孔子様の徳の高さを表す）
楷の木（孔子様のお墓の楷の木から種を持ち帰り植えたもの）
- ↓
- ⑧多久聖廟（国重要文化財。1708年多久茂文公が建てた）



ジュニアガイドに入って良かったことは？

- ・ガイドをしている時のお客様や新しくできた友達の笑顔を見れたこと（ほずみ）
- ・ガイドをしたお客様から笑顔で「ありがとう」と言ってもらえたこと（ここな）
- ・みんなと一緒にできて楽しい（あやり）
- ・大変なこともあるけど、友達ができて良かった（ゆうしょう）
- ・多久聖廟や多久について深く知れたこと。お客様の喜ぶ顔が見れたこと（あいか）

どんな子どもたちがジュニアガイドとして活動しているかインタビュー形式でご紹介します。
普段はゲームや読書が好きな、ちょっと頑張り屋の子どもたちです。



ジュニアガイドインタビュー

孔子の里ジュニアガイド活動について 活動日：毎月第2・4土曜日 活動時間：10：00～12：00 ガイド料：無料

『草場佩川日記』にみる陶磁器の産地と名称

佐賀県立九州陶磁文化館 芳野 貴典

江戸時代、肥前の磁器は積出港の名前をとって「伊万里焼」「今利焼」「今里焼」ともと称されることが多かった。明治期に鉄道が開通し産地から直接出荷されるようになると「有田焼」などのように生産地の名で知られるようになる。

草場佩川の日記には主に贈答品として藩内外の人々とやりとりされた陶磁器が登場する。その中から肥前の陶磁器の産地名称に関する記事を拾ってみたい。

・ ・ ・ 店頭多備前齋部製窯物、其製雖漸投世好、猶存古質、嘗在長崎、見友人所獲古陶、無尻輪、呼曰保利須惠、可掘地而安也。問其來歷、出於齋部土中云。齋部為埴埴地尚矣。而入或不知其名、猶我有田山之磁器、在伊万里津々名遂蔽之。又有保命酒、名醞味美、沽之酌祭

(『附驥日録 東』文化七年十一月四日条)

対馬での朝鮮通信使応接を前に、江戸にいる師古賀精里を訪ねる旅の途次、備後国鞆の浦(現在の広島県福山市)を通った。店頭に「齋部製窯物」すなわち備前焼が多く並ぶのを目にし、かつて長崎の友人から掘出しの古陶を見せてもらったことを思い起こしている。備前がやきものの産地として名高いという話から、我が国元の有田で産する磁器は伊万里港に集まるので伊万里の名で知られるようになった

と述べている。「有田山之磁器」の「山」は地形としての山ではなく窯場を意味し、皿山と同義である。「磁器」の語は江戸時代には必ずしも一般的ではなかったが、学者など一部の人の間では使われていた。

嘉永・安政年間に成立したと考えられる肥前の名産品に関する書物『肥前名物題註』『磁器』の項目では、有田の禁裏御用の窯元辻家、伊万里大川内の鍋島藩窯、有田南川原の酒井田柿右衛門家、小城松香溪焼、志田焼、白石焼等を挙げて「出鬻者多津於伊万里。故他邦総稱為伊万里陶(多くが伊万里港から出るゆえに他国では伊万里焼と総称する)」とする。また、佩川とも親交のあった武富埴南の詩「陶器賛并引」には「伊港船載、海運牲々(伊万里港は荷を積んだ船で賑わっている)」という一節があり、埴南の自註で「肥前諸陶、自伊万里発売、世称伊万里焼、猶饒器称南京(肥前で産する諸々のやきものは伊万里から売り出されるゆえに世に伊万里焼と称する。中国饒州の器を南京焼と呼ぶのと同じである)」と説明されている。

「伊万里焼」の呼称は出荷地に由来するという認識は、寛政十一年(一七九九)刊『日本山海名産図会』などにも示されているが、社会一般に共有されていたかという疑問である。佩川や埴南があえて説明していることが、かえって世間の状況を示しているように思われる。

ちなみに、上記引用箇所の最後に触れられている保命酒は鞆の浦名産の薬味酒で、佩川の義弟西鼓岳も詩に詠むなど、当時文人らに愛されていた。

是たひ吾師よりは美濃紙并藩窯の鎮紙を製述以下に頒ち贈らる。余等、官法もあり素より数ならぬ故、敢て贈酬をなさじと準擬せしに、情誼頓かに相親みて、彼方より種々の恵みを受しゆへ、聊か報答せんとすれども不期ことにて、旅囊に贈るべき物なし。島吏に謀るに和製の扇子を珍重する由なる故に、是日多々求得て持贈す。溜川も亦托めこれを贈らる

(『津島日記 下』文化八年九月二六日)

師に随って対馬に渡り朝鮮通信使を応接していた時の記事には、精里から通信使の面々に美濃和紙と有田焼の熨斗押さえを贈った逸話が見える。もともと日本側は贈答をしない決まりがあり何も用意していなかった。ところが、親睦を深めるうちに先方から色々と物をもらったので、精里の私物であったと思われる紙と熨斗押さえを急遽贈ったということのようだ。さらに、対馬藩の役人から朝鮮の人々は日本製の扇子を喜ぶと聞いて現地でも多数購入して贈っている。

「藩窯」の横には「アリタヤキ」と片仮名が当てられている。原本を確認していないので注記なのか、振り仮名なのか分からないが、有田焼を藩窯と称する興味深い事例である。現在、藩窯というと佐賀藩直営の窯が置かれていた大川内山を指すことが専らだが、佩川はお国の窯場、或いは藩が皿山代官を置いて管理している窯業地といった意味合いで使っているのだろう。

朝復屈・多二子詩二首・詩三幀及蘿蔔……此日、
屈・多二友特遣人贈詩画及漢津窯肉盒一・碗五・
及鯁魚
(文化一三年二月一八日条)

「屈・多二子」のうち「多」は唐津藩領で私塾を
営んでいた儒者山口葛山のことで、もう一名も唐津
の人物と思われる。彼らから佩川に書画と「漢津窯
肉盒」すなわち唐津焼の朱肉入れと碗五客、アワビ
(鯁魚)が贈られた。「漢津」とは唐津の漢語的表記で、
前述の『肥前名物題註』にも見られる。

大串善五来、贈其所製窯物、前年有為書壁幅、生
叔父新助来話、恵官窯茶碗、
(文政七年二月八日条)

大串善五(吾)は伊万里一ノ瀬山の窯焼であり、
前年に為書入りの掛幅を揮毫してもらった札として
自分の窯の製品を佩川に贈った。「窯物」は佩川の
日記で陶磁器を指す言葉として最も多く使われ、陶
器、磁器のどちらにも用いられる。善五の叔父の新
助からは大川内山の製品と思われる茶碗が進呈され
た。「官窯」の語を用いており、有田を指す「藩窯」
とは区別している。

与孚卿会談、数刻、遂面劉子、午前使于吉岡因幡、
至両国橋・昌平橋北而別、謁伺菴博士劉先生、以
藩窯製筆筒及舶来印肉盒・茶膏三函・平安散三瓶
及花案一函為(後欠カ)

(文政一一年一〇月九日条)

江戸で昌平黌学頭の古賀洞庵と面会した際には、
佩川が有田焼の筆筒と舶来の朱肉入れ、茶葉を煮詰
めて練って固めた茶膏、氣付け葉の一種である平安
散、しとぎ餅を手土産に持参している。子どもの頃
父精里に付いて江戸に移住した洞庵に贈るのに、故
郷で焼かれ常に机上に置かれるであろう筆筒はふさ
わしい品であった。

明日親姫様召被召呼候故、御献上之品等御役内ニ
而被仰合、御留守方存之内、大川内焼丸茶碗二十、
被入御手候二付、箱拵候義も、其筋、御頼入二相
成候事、
(文政一一年一〇月三日条)

これも江戸滞在中の記事だが、本藩八代藩主鍋島
治茂の娘で宇和島伊達家に嫁いだ親姫みよひめから大川内山
で作られた丸茶碗二〇客を収納するための箱を調製
してほしいとの依頼があった。ここでは「大川内焼」
としている。当該記事は多久家の官吏、言い換えれ
ば本藩陪臣の立場から記した業務の記録という性格
が強いため、藩内で一般的であった「大川内焼」と
いう表現を採ったものと思われる。

一峰様(多久安裕)、慶閨寺御牌前諸品調へ方、
彦左衛門(多久頼胤)殿御屋敷出勤之序、火急
之儀に付、聞届相成候由

作花一瓶 セ二十八匁

有田焼茶碗二 銀八分五厘

嶋四つ碗 銀六匁

銀御紋付御紋一つ 錢五十文つつ

都而廿四所メ六十匁

御靈膳一枚 代銀九匁

御茶湯台二 代銀四匁

此条、過去之五六月は不被相上、七月廿五匁
に評決
(天保四年八月二日条)

佐賀の慶閨寺には龍造寺長信から六代までの多久
家歴代の墓があるが、位牌の前に供えるために新調
した器物の中に「有田焼茶碗」二客が含まれている。
茶碗とは言っても、飯碗ではなく、「御茶湯台」とセッ
トの湯呑碗・茶呑碗かと思われる。金額は八分五厘。
四分〓金一両相当なので二客で二両以上と比較的高
額である。特注品ゆえであろう。ここでは「有田焼」
の語が使われている。

以上のように、佩川は現代の我々が有田焼と呼ぶ
ものを指して「有田山之磁器」、「藩窯」、「有田焼」
と称している。「伊万里焼」という言葉は一切用い
ていないが、これは彼のみが特別なわけではなく、
佐賀では江戸時代にあっても領内の陶磁器を各産地
名で呼ぶことがままだり、地元特有の状況があった
ようである。

【付記】

引用に当たっては読みやすさを考慮して、旧
漢字は常用漢字に、片仮名は平仮名に改めた。

【参考文献】

草場佩川を読む会編・福井尚寿翻刻(二〇二三、
『附驥日録 東』現代語訳)
三好嘉子校註・解題、一九八〇、『草場佩川日
記』、財団法人西日本文化協会
芳野貴典、二〇二四、『武富圀南「陶器賛」及
び「詠磁器」、佐賀県立九州陶磁文化館編『研
究紀要』第九号

龍造寺隆信歿後の龍造寺氏と多久安順

佐賀県立図書館 郷土資料調査・編さん課

野下 俊樹

天正一二年三月二四日、戦国大名龍造寺隆信が島津・有馬氏の連合軍との合戦で戦死を遂げる。肥前国の大部分へと勢力を広げ、北部九州に影響力を有した戦国大名の死去は、龍造寺氏にとっては存亡の危機であった。かかる状況においては、つとに重臣鍋島直茂が龍造寺氏の命脈を保ち佐賀藩へとつなげた功労者と位置付けられてきた。

また、別稿では隆信歿後の龍造寺家中においては、当主龍造寺政家が当主として依然主体的動きをみせていたこと、一方で豊臣秀吉の九州平定後は、主に公儀との関係において当主政家の家中での優位性が低下し、これに連動する形で直茂の政治的立場が上昇していったことをいくつかの史料から示した。概して、当主政家や鍋島直茂の位置は明らかになりつつある。

しかし、龍造寺氏の動向を当主隆信・政家や鍋島直茂によってのみ跡付けるのは適当ではない。龍造寺隆信期において、龍造寺長信ら一族・一門が龍造寺氏の要地を押さえ、急速に拡大した領域支配を支えていたことが明らかにされている。また、近年では、中村知裕が龍造寺家晴を重視する見方を示している。時期が下って佐賀藩が三家・親類・親類同格ら大配分と、家老・着座の藩主直属の家臣団によって構成され、これが龍造寺氏の支配形態の延長線上に位置づけられていることから明白であるように龍造寺氏の存在形態を明らかにあたっては、隆信歿後から佐賀藩成立に至る期間における一族・一門の在り方を位置づける作業が不可欠である。

初代多久久安順は、戦国大名龍造寺隆信歿後において鍋島勝茂を支えたことでよく知られている。その事蹟は『水江事略』や『勝茂公譜考補』などに詳しい。小稿では、多久安順の動向を示す古文書を二、三紹介し、右に示した問題を考える備えとしたい。

さて、多久安順の政治的位置を考える上では、そもそも彼の動向を押さえておく必要がある。その前提として多久安順の父龍造寺長信に触れておきたい。龍造寺長信が龍造寺隆信期において重要な役割を果たしていたことは宮島敦子や中村知裕の研究によって明らかにされている。その役割は材木といった資材調達及び流通の管理のほか、別稿でも若干の補足を加えたように、龍造寺長信は隆信の勢力拡大において西肥前方面の管轄であった。一方、龍造寺隆信歿後、長信の受給給文書はほとんど見られなくなる。それは、一つは隆信歿後の龍造寺氏が島津氏との和平を選択し、西肥前における戦乱が一応の終息をみたこと、今一つには、軍事的な焦点が筑後国をめぐる対大友氏へと移行した点にある。

この点を踏まえて多久安順の動向に目をむけると文化的な事蹟が目につく。

【史料二】利休百会記

（『茶書古典集成6 利休の茶書』）

（前略）

十月廿六日昼

四てう半

四はうかま

なへしまひせんかミ殿

りうそうし六郎次郎殿

さけノやき物 汁たら

せと水さし ほうみそ めし

茶入しりふくら

引

木まほりちやわん なます

おりため

菓子 ふのやき

はしたて

やきくり

（後略）

【史料二】は、天正一八年と推定される資料であり、千利休の茶会に関する記録である。ここには、「なべしまひせんかミ殿」（鍋島豊前守信房）とともに「りうそうし六郎次郎」（多久安順）の名前がみえる。当該期は龍造寺氏当主政家・高房も上洛していた。多久安順もそれに同行する形で上方に滞在していたのであろう。

また、本文書に関連して、茶人の桑山宗仙が多久安順に宛てた消息が残されている。

【史料二】桑山宗仙筆消息

（慶應義塾センチュリー赤尾コレクション）

猶々御出之節三斎老へ御申是も御同道まち

入候

其以来者久々不得御意候、弥御無事之由珍重候、昨夕利休居士夜嘶参會参候様申来候、貴公御同伴申入候由御報候、無御差支拙宅まで待入申候、謹言

廿日

龍造寺六郎様

桑山左近

まいる

本文書において桑山宗仙は「御無事之由珍重候」と述べており、以前から多久安順とは面識があったようだ。文書の主題は、桑山宗仙が千利休から夜嘶（茶会）に招待されたこと、返答として多久安順の

同伴を所望したところ差し支えない旨利休から返答があったことを伝えたものである。このことは、多久安順が上方の文化人との交流に参画できるだけの文化的素養を持ち合わせていたことを示唆している。

なお、文中の三斎老は、多久家文書にみえる中林房であろう（「多久家所蔵文書 全」）。

天正一八年正月、豊臣秀吉は龍造寺高房に対して龍造寺家中の各々に対する知行割当を通過した。そのうち多久安順は一万七十石を安堵されており、龍造寺一族のなかでは龍造寺家晴・後藤家信（龍造寺隆信）に次いで多く、鍋島勝茂を凌ぐ石高である。龍造寺氏の家督が政家から高房に移行した後においても、龍造寺家中において龍造寺長信・多久安順系が重きを置かれていたことを示唆している。

文禄五年六月二日、文禄の役に際して龍造寺一族・一門は連署して龍造寺高房・鍋島直茂・鍋島勝茂へ忠節を誓う起請文を提出した（「多久家所有之候御書物写」）。この願文は、龍造寺高房を「様」付けする一方で鍋島直茂・勝茂を「殿」付けしており、明確な差をつける一方で、鍋島直茂の龍造寺家中における地位の再確認とその地位が鍋島勝茂へと移行することを龍造寺家中が承認する意味があったと推測される。そして、それを誓約した面々の中に「龍造寺六郎次郎家久」（多久安順）の名前もみえる。

さて、鍋島氏と多久氏の間で象徴的なのは、慶長二年一月二八日に鍋島直茂が多久安順の養子茂富（「龍造寺孫四郎」）から所望されて「孫四郎」と名付けている点である。

【史料三】「葉隠聞書校補」鍋島直茂書状写

慶法師仮名之事、依望被任孫四郎候、追而藤八殿江可申候也、

慶長二年

鍋島加賀守

十一月廿八日

龍造寺孫四郎殿

直茂

名前をつけるという行為の重要性は言を俟たない。かかる行為が幼少の多久茂富の独断とは想定しがたい。背景には龍造寺長信や多久安順の意向を想定すべきだろう。鍋島直茂はこの件について龍造寺高房の追認を得る必要性に言及しており慎重な姿勢を示しているが、多久氏の鍋島直茂・勝茂への接近は明白である。

慶長一二年九月六日、龍造寺高房が歿すると、佐賀では葬儀の進め方が問題となった。鍋島直茂は「与兵」（多久安順）・「主水」（鍋島茂里）と談合の上、佐賀で目立たないように油断なく準備を進めるよう鍋島生三（道虎）に申し伝えている。

【史料四】「坊所鍋島家文書」鍋島直茂書状

（龍造寺家所蔵）

あ

（墨引）生三まいる加

今日左衛門尉殿御着之由申来候、駿河殿葬之儀、いかゞ可申付候哉、与兵・主水へ談合候て、爰元にて目に立候ハめやうに可被相調候、不可有油断候、恐々謹言、

（慶長二年）
廿五

加（花押）

当主の死去は藩の存続にかかわる重大事であり、その葬儀は鍋島家にとって騒擾の可能性を孕んでいた。その準備を多久安順に任せている点に、彼を重用する鍋島直茂の意識が表れている。また、直茂は、龍造寺長信・後藤家信から贈られた葬儀の香銭は、他者とは異なるものであるから、しかと留め置くようにと、鍋島生三を介して多久安順・鍋島茂綱へと伝えている（「坊所鍋島家文書」）。

一方、江戸幕府は今後の当主をどのようにするか佐賀藩に照会し、佐賀側は龍造寺氏の代表として龍造寺家晴（道安）・道安・多久安順・龍造寺信明が江戸に上府し、後継者として鍋島勝茂を推薦している（『勝茂公譜考補三乾』、『佐賀県近世史料第一編第二巻』）。龍造寺家中において多久安順が意思決定に関与している様子が看取される。

おわりに

小稿では、多久安順に関する数点の史料から、その動向を追いかけた。多久安順は龍造寺政家期においては政治的動向は然程表出しないものの文化的素養により上方で文化人と交流を行い、人的関係を構築している。当主上洛に随伴するなど龍造寺長信に続き当主近くにいたと考えられる。一方で、文禄・慶長の役を通して鍋島氏に接近し佐賀藩成立前後においては鍋島直茂・勝茂の信頼を得ている。龍造寺氏から鍋島氏へと御家が交代していく過渡期にあって、多久安順の動向は龍造寺内部から龍造寺当主と鍋島直茂・勝茂の評価を映している。

翻って、多久安順のかかる活動を経て、多久家は鍋島氏から重用され、のち親類同格として佐賀藩制に組み込まれていく。

【参考文献】

- 藤野保編『佐賀藩の総合研究』（吉川弘文館、一九八一年）
- 鈴木敦子『戦国期の流通と地域社会』（同成社、二〇一一年）
- 中村知裕「龍造寺氏の肥前西部侵攻と龍造寺長信」『古文書研究』八三号、二〇一七年
- 拙稿「龍造寺氏の勢力拡大における龍造寺長信の役割」『鶴山書院報』一六号、二〇二四年
- 拙稿「龍造寺隆信没後の龍造寺氏―天正十二年十一月十八日付龍造寺政家判物の紹介を兼ねて―」『佐賀県立佐賀城本丸歴史館研究紀要』二〇号、二〇二五年

草場船山「蟋蟀之吟」

(翻刻文紹介 其二)

草場佩川の会事務局 石丸 隆司

【はじめに】次に掲載する翻刻文は草場船山(草場佩川の長男)が著した「蟋蟀之吟」であるが、「草場船山日記(文献出版)」の「草場船山略年譜」によれば次のように記されている。『嘉永七年(安政元年)(一八五四)三十五歳 正月領主茂族に属して長崎に行く。茂族はこの後船山に邑政改革の意見の起草を命じた。これが「蟋蟀の吟」である。しかしこの建白書は重役たちの忌諱に触れ、謹慎を命ぜられた。』

船山が提示した意見のどのような具体的な内容が当時の重役たちの忌諱に触れたのか知りたい、そこから当時の思想的、政治的状況も解るのではというのが、筆者が翻刻を試みた主たる動機である。

翻刻にあたっては、多久市歴史民俗資料館蔵の「蟋蟀之吟」を用いた。

原文は、漢文と書き下し文の両方が混合した文であるので、原典に出来る限り近いものにしたという理由から漢文はそのままの形をレ点や一、二点は残して表記した。また助詞や助動詞「バ」や「ズ」等の濁点も原典では統一されていないので、筆者の判断から全て濁点を省いて表記した(凡例 未ダ幾バクナラス↓未タ幾ハクナラス)。旧字、俗字等は出来るだけそのまま用いるようにしたが、一部常用漢字に改めたものもある。不明な文字は●で表記した。

翻刻作業にあたっては、九州陶磁文化館の学芸員、芳野貴典氏より多方面にわたり、御助言、御教示、御

指導をして頂いた。ここに「蟋蟀之吟」翻刻文の掲載の運びとなったことは、芳野氏の多大なる協力なしには成し得ませんでした。心より感謝申し上げます。

蟋蟀之吟

一名筆徒虫之音

蟋蟀之吟自叙

草蔭夫巴氏稿

嘉永六年冬十二月鄂羅斯國使節布恠廷我長崎ノ港ニ來航スルヤ 主君軍機ノ總督タルヲ以テ星馳行役三旬ノ後夷人開帆 主君亦東ニ還ル此役ヤ臣夫巴氏儒生ヲ以テ扈駕ヲ得タリ 主君一日慨然太息シテ曰我家先世有大勲勞于國家夙ニ閭閻ヲ以テ著稱セラル今吾齡弱ク智暗フシテ識淺シ一旦此重任ニ當リ日夜辛苦食不レ甘味寝不レ安席唯恐ラクハ機宜ヲ失錯シ 閣下ノ耻ヲ貽シ遂ニ天下ノ憂ヲ為サンコトヲ今也幸ヒニ夷人退帰吾亦得テ無ラニ大過ラ一歸レ邑將ニ有レトス他日歸ラハ則必ス家政ヲ一新シ士氣ヲ淬勵シ以テ祖先ノ舊ニ復シ國家今日ノ急ニ副ヘント欲スト夫巴氏於是乎涕泗ノ胸ヲ霑スヲ覺ヘス乃賀シテ曰 主君立志ノ誠果シテ今日ニ發シ邑家ヲ再造スルヲ得ハ此ヲ夷人ノ賜ト云ハンモ可ナリ凡事自カラ屈スルニ伸ヒテ驕ルニ敗レサルハナシ且試ニ論セシ之ヲ夷寇本邦ノ俗大抵与支那相類ス支那人中華ヲ以テ自カラ居リ外洋諸蕃ヲ蔑視シ遂ニ阿芙蓉ノ禍ヲ招キ流毒蔓延天子殆ント震驚スルニ至ル醜態亦極レリ本邦ノ獨ニ立シ于東海ニ神國ヲ以テ自称スル猶支那人以ニ中華ニ而居亦同シク夷人ノ侮リヲ免レス要レ之ニ我与ニ支那ニ皆自驕ツテ屈ヲ人ニ受ルニ至ル即チ世ノ名家閥閥亦自驕ツテ家必衰ヘ身必昏愚ニ墜ル者滔々皆是ナリ今主君自悔ヒ自懼ル、ヲ知ル

實ニ千歳ノ好機會ト云ヘシ其ノ歸ル未タ幾ハクナラス号令ヲ發シ言路ヲ開キ周ク藹藹詢リ以テ採用スルトコロアランヲ欲ス其苟モ欲レ言ノ志アツテ今日不レ言は豈

ニ蟋蟀ノ秋來テモ鳴カサルニヒトシカラスヤ因テ言フコト左ノ如シ太意五代ノ康澄力論ニ本ツキ吾 君ヲシテ時事ノ懼ルヘキヲ知ラシメ以テ益々遷レ善ノ道ヲ啓ンヲ欲ルノミ亦唯草茅間ノ哀鳴安ン玉座ノ邊ニ達スルヲ得ンヤ昔七年ノ秋七月也

唐康澄上疏論時事、其言曰、為國家者、不足懼者五、深可畏者六、三辰失行、不足懼、天象變見、不足懼、小人訛言、不足懼、山崩川竭、不足懼、水旱蟲蝗、不足懼也、賢士藏匿、深可畏、毀譽乱真、深可畏、直言不聞、深可畏也、五代史

好レ善惡レ惡要レ出ニ於誠 不レ飢不レ寒猶嫌ラヌ

ニ平仁ニ

○舜好ミ問好ム察スルヲニ邇言ヲ一禹好ミ善言ヲ一ト好レ善ヲハ人主ノ美德ナリト雖トモ其好ミ實心ヨリ出サレハ未タ美トスルニ足ラス傳云虢君ハ其●乎好レ善惡レ惡或日何ン為レソ●日好レ善而不レ能レ用惡レ惡而不レ能レ去ト旨ヒ哉言ヤ其ノ好ミ真ノ好ミニ非サレハ葉公ノ徒ニ画龍ヲ好ンテ真龍出レハ逃去ルカ如シ其ノ惡ム真ノ惡ミニ非レハ魏武ノ雞肋ニ於ル如ク棄ルニモ心殘テ快ク切斷スル難シ兎角如ク好ミ好ミニ好ミニ惡ム惡ムニ實ニ肺腑ヨリ出ルノ誠ニ非レハ人ヲ動カスニ足ラサルナリ抑正邪不ニ相容レ一善惡難ニ並レ行レ一コトナレ苟モ善ヲ好ムノ心アルトモ去レ惡ノ務メスン豈ニ益アラシヤ

傳云惡レ善懼レ乱ルヲニ其苗也

文王之民無ニ凍餒之者一ト我邑古ヘヨリ飢者二介抱米ト称レ毎日一人ニ米若干ヲ與ヘ凍者二饑餓ヲ賜ハルコトアリ仁恵ノ至リト云ヘシ然トモ未タ不仁ヲ不レ免ノ一事存セルアリ如何トナレハ小民擧レ子既ニ二人三人トナリタル後ハ往々生ヲ遂ケシムルヲ得ス蓋シ其窮乏ノ極リ何レトモ鞠育ノ道終ヘカタク故ナリ為ニ之上者聞レ之ハ酸鼻ヲナサルヘケンヤ後漢ノ賈彪新息ノ長タル日小民貧困多ク不レ養レ子時ニ賊ノ殺レ人アリ掾吏其罪ヲ正サンヲ請フ彪怒テ日母トシテ子ヲ殺スハ天ニ逆ヒ

道ニ違ヒタル大罪ナリト遂ニ先ツ其罪ヲ正シケレ殺レ
人タル賊モ聞レ之ヲ自分ヨリ訴ヘ出テ伏レ罪タリサテ数
年ノ間人ノ蝕ク子ヲ育シ養フ者千人ニ及ヘリ日此賈父
ノ所生也トテ皆其子ニ名クルニ賈ノ字ヲ以テセリト
ナリ人ヲ育テソコト第一我邑ノ急務ニシテ平世築作
ノ役乱時兵賦ノ事都テ這裡本ツク義ニテ地多ク人少フ
シテ田地モ荒蕪スルニ至ル村モアレハ其必ス人民生育
ノ恩ヲ施シ加レ之ニ制産ノ法ヲ以テシ漸クニ風教ニ向
フヲ知ラシメハ則聖人既ニ庶而後富レ之而後教レ之ノ道
ニモカナヒテ不待二十年ヲ其驗シヲ見ルヘシ

大臣ハ須レ有ルニ大臣ノ事ニ小吏ハ未レ免レニ小吏之
習

大臣ハ家ノ柱礎士民ノ所望ニシテ人心ノ向背係レリ
以テ慎マルヘケンヤ傳曰若有一ケ臣断々兮無ニ他伎一其
心休々焉其如レ有客スルトト蓋其風節ノ断々タル長松
ノ岸壁上ニ矗立シテ其下常ニ清風ノ悦ムル人ヲアルガ
如クナルヘキナリ

夫長ニ一藝ニ名ニ一術ニ固ヨリ可レ称コトナレトモ大臣
ニ在テハ未レ足レ為ニ輕重ニナリ宜シク一等ヲ高フシ先
立レハ其大者ノ小者不レ能レ奪フ之節以テ足ニ以テ辣
動人ヲアリ而メ能ク坦レ懷ヲ有レ容則所謂人ノ有レ技若
ニ有レ之文藝武伎モ自カラ興起スヘシ井伊侯直政其
子直孝學レ槍ケルヲ見テ戒テ曰ク吾曾テ争乱ノ世ニ生
レ攻城野戰親カラ揮レ槍擊レ劍ノ事ヲ事トスルヲ免レス
汝今人ノ君トナツテ士卒ノ事ヲ為スヘンヤト此堂々タ
ル大諸侯ノコトニシテ彈丸小邑ノ事可レ比ニハ非サレ
トモ苟モ一隊ノ長トナリ一邑ノ責ニ任スル者豈輕重先
後スルトコロ無カラランヤ

○我邑實ニ龍造寺氏ノ裔ニシテ勝國ノ時ニ在ツテ疆土
ノ大今日ニ倍蓰スルアリ是ヲ以テ家臣ノ多キ旧ニ加ル
アリ減スルナシ故ニ小禄ノ臣少シトセス其俸米ニ至ツ
テハ殆ント以テ不レ足レ代レ耕ナリ人情我ニ不レ足アレ
ハ必ス他ヲ羨ム況ヤ鄙夫ノ心未レ得レ之ハレ得レ之

ハ患レ失レ之コトナレ能公事ヲ勤勵シ廉節ヲ執守ル者幾
人カアル其レ必ス柔順倭便官長ノ意ヲ奉シテ趨走シ利
ヲ錐刀ノ末ニ争ヒ何レソ家ヲ肥シ身ヲ榮ヘシメ度トノ
意念不已ハ自然ト忠節ノ心薄クナルハ勢ノ不レ然能ハ
サル処欤故ニ苟モ吏ノ勤且廉ナランヲ欲セハ宜ク冗官
ヲ汰シ濫職ヲ省キ其俸以テ足レ代レ耕シメハ何吏ノ廉且
勤サルヲ憂ンヤ古人云用ニ雜兵之多ヲ不レ若用ニ精
兵之少

官仕多ク因蔭 政學何ソ為ス岐ヲ

○孟子曰異哉子叔疑使ニ已メ為レ政不レ用則亦已矣又
使ニ其子弟為レ卿ト此君子ノ深ク惡ム所ナリ夫苟一人
ノ樞要ニ居リ威權ヲ擅ニスルアレハ其子弟同族輒レ装
シテ出ツ遂ニ連根引レ蔓日同ニ蕃滋シテ一旦或ハ拔去
ンヲ欲ストモ容易ニ去ルヘカラスサテ必スシモ其人自
カラ挙用スルト云心ニルモ他人能ク其意ヲ逢ヘテ為
レ之ニ推轂シテ亦自カラ納レ媚ノ地ヲナスナリ故ニ必ス
シモ樞門ニ限ルニ非ス小吏ト雖トモ大抵父勤レバ子勤
メ兄用ラルレハ弟用ラレ叔挙ラルレハ挙ラルト云勢ヒ
ナリ此ヲ子ヲ易ヘテ用ユト云ハンモ可ナラン力可數カ
ナ抑權ノ一字安危ノ所関不レハ與レ之ヲ則不レ可ニ以為
レ事ヲ与レハ之ヲ則招ク禍ヲ以テ慎シマサルヘケンヤ

○元禄年間 雄山君建 聖廟ニ設ニ學校ニ爾後百五十
年来弦誦洋洋師儒輩ヒ出テ拔擢セラレテ仕于本藩者モ
既ニ數人ニ于ニ及ヘリ可レ謂レ盛矣然リ而メ風俗政治
ノ美イマタ一時可レ誦百世可レ歌銀臺臺山ニ公ノ世
ノ如キアラス如キ是乎學之無キト益ニ于國家ニ其レ
必ス有レ以テ蓋學ハ自カラ學政ハ自カラ政ト兩途ニナ
ルニ職由スルニ非スヤ元来學問ヲ遠クルト云ニモ非レ
モ政務ノ事ハ別ニ一種ノオアツテ讀書ニ関カラストテ
譬ヘ儒生ノ所レ論アルトモ束閣シテ用ヒス但其喙ノ長
キヲ惡メルノミ昔者鄭ノ然明諸生ノ頻リニ執政ノ上ヲ
議スルヲ惡ミ郷校ヲ毀ント欲セシニ子產ノ云ヘルニハ
衆士ヲシテ學校ニ聚議セシメ其所ハ善トスル 吾行ハンレ之

ヲ其所ハ惡トスル 吾改シ之ヲ是吾師也トテ遂ニ不サリ毀タシ
トナリ兎角政學一途ニ出テ後 先君勸レ學ノ遺澤モ長
ク行ハレンカ

廉耻置之ニ於庭外ニ 文武何シスレツニ為サル呼嚴課ニ

士ノ士トスヘキハ廉耻名節ニ在リ苟モ廉耻名節無ケレ
ハ百能超人アルトモ貴フニ足ラサルナリ而メ廉耻名節
ノ心ヲ生スル多ク忠難憂威ノ中ニ在テ安佚無事ノ際ニ
失ヒ易シ元禄以前未タ兵乱ヲ去ル久カラサレハ忠義名
節ノ士モ比々ト起リタレトモ太平日ニ盛シニ國家閑暇
弓矢在レ囊ニノ世トナツテハ文藝武伎大ヒニ行ハレ往来
挾レ冊講武ノ声耳ニ喧シク韵人墨客ノ糊口于四方者數
ヲ不レ知ヲ劔ノ長キ槍ニ齊シク槍ノ細キ麻茎ノ如シ文ト
ナク武トナク皆遊戲ノ具トナルニ過ス是故ニ萬卷ヲ讀
テモ道不レ行ニ于父兄妻子ニ其術數流ノ秘ヲ究テモ行
ヒ不レ信ニ于州里ニ廉耻名節ナトノ事ハ天外ニ抛テ顧
ミス豈亦忠臣義士アランヤ養士譬ヘハ菓木ヲ養フカ如
シ餘リ花盛ニ過レハ實ノリ必ス少シト抑亦可キ然理
ナリサテ万々世無事ナラハ文武ノ花ハ即チ太平ノ象ト
觀ナシテモヨカルヘケレトモ近歲ノ如ク海徼多レ虞外
患在旦夕ニ至テハ此迄ノ死文武ニテハカナフマシ必ス
其長劔ヲ短シ細槍ヲ肥シ浮華ヲ抑ヘ実用ヲ尚ヒ士ヲシ
テ廉耻ノ刃ヲ磨キ名節ノ鋒ヲ砺キ弘安ノ竹碕五郎力如
キ者ヲ得テ彼ノ巨艦大銃ヲ拉シキ度モノナリ為レ之カ
上ニ者宜ク開ニ功名之門ヲ廣ク求メ廉耻名節之士豈無
ラン人ヤ

草場船山の「蟋蟀之吟」については、今年度
に当財団で実施します「多久の歴史と文化を学
ぶ講座」で「『蟋蟀之吟』を読む」の講座を開
催予定です。詳しくは16ページの講座案内をご
覧ください。



(多久市西溪公園内に移築されている大寶聖林碑)

大寶聖林碑はなぜ多久にあるのか？

公益財団法人孔子の里 理事 服部 政昭

大寶聖堂とは

武富威亮は、元禄五年(1692)佐賀城下の北の郊外、大財町六反田の私邸内に、自ら設計し、私財を投じて孔子様の堂の造営に着手する。そして三年の月日を経て落成。堂の傍らには講堂「鳶魚齋」と塾舎「依仁亭」を設けて佐賀藩士の子弟に経書を講じていた。多久聖廟(恭安殿)の完成に先立つこと十二年も前のことであった。もちろん、多久の聖廟建設の際には、威亮が相談役に任じられて、設計から施工に関して指導に関わっている。完成時には、『宝永五年仲秋仲丁奉祝肥州小城郡多久邑東原精舍之釋菜』の祝文を献じ。威亮の嫡男英亮も、『鶴山書院遷座記』を奉獻している。

武富威亮とは(母は多久家家臣の娘)

武富威亮、字は伯、通称は一郎右衛門、号は簾斎。明国人十三官の曾孫にあたる。父は武富四郎右衛門常古。母は、多久家家臣、今村藤右衛門順忠の娘。(此時始而仕長門守安順公)。順忠の女子、大財村武富氏妻、武富市右衛門母。(元禄十二卯閏九月十三日卒法名寂和湛心)と多久諸家系図の中にみる事ができる。

大寶聖林碑の造営

大寶聖堂は、大財橋から廉齊橋の間に広大な敷地を所有していた。その邸内に威亮は、七十七歳の時、聖堂が出来てから二十一年後の正徳三年(1713)に、聖堂を営んだ記念として「大寶聖林碑」を建立している。亀が背中に、高さ二メートル、横幅七十センチの碑石を背負い碑面の上部には、表裏両面に篆額が設けられ、表面には「大寶聖林碑」裏面には「萬古長者石」と大書してあり、下部面には、約一千文字に及ぶ碑文に聖堂設立の目的や、師に対する感謝、この想いを永久に伝える事を願った文面が漢文で刻んである。



(大寶聖堂の楷樹)

聖林碑の移設

武富家十世の子孫、武富時敏(安政年十二月九日生)は、佐賀の乱に参加した後、上京。大隈内閣では大蔵大臣、第二次大隈内閣では逓信大臣として活躍するが、時代とともに広大な敷地を維持して行くのが困難になり、外交官の十一世武富敏彦(東京帝



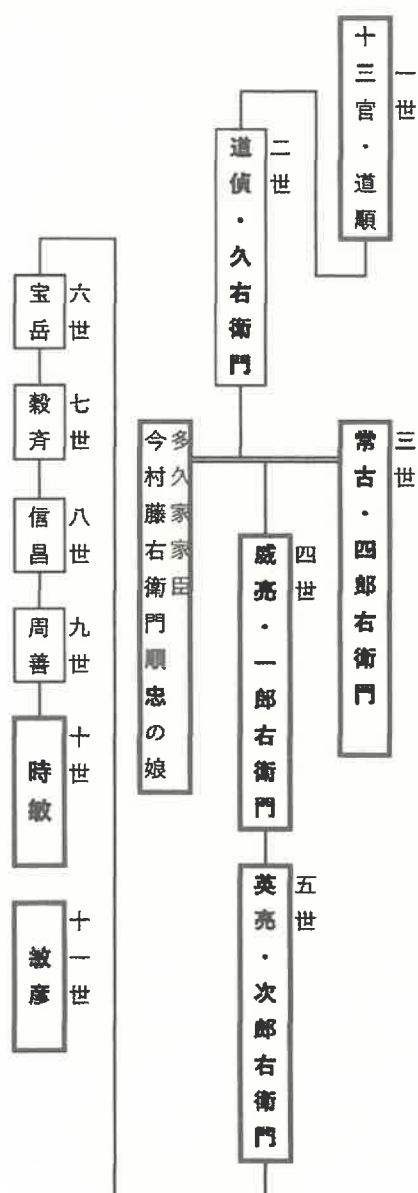
国大卒）は、昭和二十六年（1951）、先祖の土地が荒れていくのを心配し、同じく外交官で、多久村西の原出身の坪上貞二（東京高等商業学校卒・現

一橋大学）に、相談。先祖の遺産を永久に保存していくためには、多久聖廟がある多久に移転するのが一番良いだろうと、炭鉾王と呼ばれた高取伊好の娘婿（高取盛・高取鉾業株式会社社長・東京帝国大学卒）に依頼。昭和二十八年に高取盛氏により、多久聖廟の近くの西の溪公園に移築された。

分割分譲された大寶聖堂の土地は、材木町の由緒ある東医院の東種一先生が孫娘夫妻（医師、千々岩博信・正子）の住居として購入し今日に至っている。佐賀藩の青年藩士たちが学問を求めて行き交っていた通りも今では往時の面影は何一つ残っていない。路地の邸門脇の石柱「大財聖堂址 當武富邸内二在り」皇紀二千六百年記念 佐賀市教育委員会」。

ている。また、孔子様ゆかりの樹木「楷の木」が人工交配で育苗され、多久聖廟から植樹されている。武富威亮の両親のお墓「武富氏常古同妻室壽珍」と、威亮のお墓「廉斎先生拍君墓」は、ともに呉服元町の称念寺に祀られている。

大財武富威亮家略系図



（大財に残された礎石）

華表を仰ぐ

多久市郷土資料館長 藤井 伸幸

第五回 多久町多八幡神社の鳥居

〔福海流遠 壽山長保〕

多八幡神社は、県道多八幡線沿いにある多八幡公民館の四つ角から、約400m南に位置しています。

多八幡の儒学者深江順房が、江戸後期に執筆編集した多八幡の地誌「丹邱邑誌」によれば、「若宮八幡(仁徳天皇応神天皇神功皇后太神ヲ祭ル)郭内ニアリ：神門二基(一基ハ慈照院府君建立)：末社毘比羅石祠興玉神祠八天狗石祠：坐主役氏三鏡坊神主下社家高野社ヨリ兼帯正治中多八幡直梶峯山麓ニ新建」と記されています。

この部分は、「若宮八幡宮(今日の多八幡神社)は仁徳天皇、応神天皇、神功皇后、姫太(二人)神を祀っている。郭内(構内)とも称し御屋形があつた今日の多八幡町付近)にある。：神門(鳥居)は二基あり、一基は慈照院府君(九代領主多八幡親)が建立した。末社として毘比羅石祠、興玉神祠、八天狗石祠がある。：座主は役氏三鏡坊、神主下社は高野神社(今日の南多八幡町)が兼務している。正治年間(西暦1199-1201年)、多八幡直が梶峯山麓に(若宮八幡宮を)新築した。：」と解釈できます。

なお「丹邱邑誌」によれば、多八幡直は摂州多八幡の住人で武功があり、源頼朝から領地を賜り、肥前下多八幡に居住し、後に上多八幡(梶)峯山に城を築いた、とあります。

今回紹介する鳥居は、右に記載した慈照院府君建立の鳥居ではなく、神社の北西、市道の北側にある鳥居です。

額東には若宮八幡と刻まれている



多八幡神社鳥居

(正面右の柱に刻まれた銘文)

而以爲社頭之莊嚴者也

神威年年盛靈日日新矣仍建造一基

春秋之禮莫不意國家之政務弥正故

五世相肥而上從府君政下慰居民勞

到前美作守茂辰公前長門守茂矩公

□内は読めない文字

前長門守安順公前圖書守茂富公今自當処之領主前和泉守藤原長信公壇勸請於此地而以降鎮護年尚矣粵夫當社者自馬臺之坂東鶴岳之靈若宮八幡大菩薩 石衛門一字 貴奉造立鎮西肥前州上多八幡

〔石衛門〕は残存する字画から推定した文字

銘文は概ね次のように書き下すことができますが、正しい読みは不明です。

而以爲社頭之莊嚴なる者也

神威は年年盛靈□は日日新たる矣

仍ち一基を建造す

春秋の禮莫怠らず 國家の政務弥正す

五世の相肥して 上は府君の政に従い

下は居民の勞を慰む

到る 前美作守茂辰公 前長門守茂矩公

前長門守安順公 前圖書守茂富公 今に

當処の領主前和泉守藤原長信公 自り

此の地に於いて壇勸請し 以降鎮護の年

尚しき矣粵

夫れ當社は 馬臺の坂東鶴岳の靈自り□す

若宮八幡大菩薩 石衛門一字

貴みて造立奉る 鎮西肥前州上多八幡

現代語訳の案は次のとおりです。

よくよく思うに社殿は莊嚴です。

神の威光は年々隆盛で、祖靈の威光も日々新たにたっています。そこで、(鳥居)一基を建立します。

春秋の祭礼を怠ることなく、國家の政務も更に是正しています。それゆえに、

五代の宰相はあつく、上は府君の政に従い、下は領民の勞苦を慰めています。

前の美作守茂辰公(二代)、前の長門守茂矩公(三代)、

前の長門守安順公(初代)、前の圖書守茂富公、ここに至る、

最初の領主(領祖) 前の和泉守藤原長信公より、

この地に祭壇勸請して以降、鎮護の年月は何と長く久しいことです。

それ当神社は、流鏑馬で知られた坂東(関東)の鶴岳(鶴岡)八幡宮より神靈を分祀した

若宮八幡大菩薩です。石衛門一基を、

謹んで建造奉ります。鎮西肥前州上多八幡。

(正面左の柱に刻まれた銘文)

先願

社門鎮靜 國土升平

更希

神力加持請願圓滿靈威新処万縁吉祥

文武亨通 福海流遠準擬於江淮渚

子孫相續 壽山長保比並於蓬文瀛

親族同齊和樂 臣民悉皆安康

宮司 鏡覚坊明全

奉行 福地六左衛門

禪興 見住泰長雪堂是記

維時萬治三辛丑歲姑洗吉旦

銘文は概ね次のように書き下すことができますが、正しい読みは不明です。

先に願う 社門の鎮靜 國土の升平

更に希う 神力の加持 請願の圓滿 靈威の新処

万縁の吉祥

文武の亨通 福海の流遠は江淮の渚に準擬し

子孫の相續 壽山の長保は蓬文瀛に比並す

親族は同齊和樂 臣民は悉皆安康

宮司 鏡覚坊明全 奉行 福地六左衛門

禪興 見住の泰長雪堂が是に記す

維れ時に萬治四辛丑の歳 姑洗吉旦

現代語訳の案は次のとおりです。

先に願います。境内が鎮靜化し、國土が安寧化することを。

更に希います。神力が領民を加護し、請願が功德に満ち、

靈威が新たに留まり、万縁に幸先がよいように。

文武に支障なく、幸福の海が遠く流れる事、

長江淮水(河)の清流に準擬するように。

子孫が相續し、長寿の山が長く保たれる事、

蓬文瀛の神山に比肩するように。

親族は同じく齊しく和樂し 臣民は悉く皆々

安泰となるように。

宮司は鏡覚坊明全、奉行は福地六左衛門、

禪興(禪の興隆に尽くす人) 現住の泰長雪堂がここに記す。

この時は萬治四(1664) 辛丑の年陰曆三月吉祥日。

なお「丹邱邑誌」若宮八幡の鐘銘(現存せず)に「：萬治辛丑仲呂吉旦：前禪興見養長雪堂叟代宮司鏡覚坊明全而謹書」

とあります。鳥居銘文の泰(養) 長雪堂と鏡覚坊明全が、同年

陰曆四月に鐘の銘文にも関わっていたことが分かります。

また「丹邱邑誌」山伏の項に「：鏡学(覺) 坊：郭内若宮

八幡ノ傍ニ在リテ社僧也：六世明全法印：多八幡諸家系譜第五」

の「福地氏系圖」に「福地六左衛門：元禄元辰九月廿六日卒享

年八十八」と見えます。

来訪・来信・雑録

- 4月9日 学校関係者の秋葉事前練習
4月14日 春季秋葉総練習
4月18日 春季秋葉
4月28日 令和6年度公益財団法人孔子の里の監査
5月9日 令和7年度第1回理事会
5月19日 令和7年度佐賀県地域づくりネットワーク協議会総会
5月27日 令和7年度定時評議員会
5月29日 有田町同朋・同朋広瀬・同朋天神保育園来訪
(論語素読会)
6月3日 鶴山塾「中国古典の扉①」
(講師：武田 耕一 公益財団法人孔子の里 理事)
6月5日 鶴山塾「楽しもう短歌①」
(講師：角本 久子 日本歌人クラブ佐賀県幹事)
6月7日 鶴山塾「古文書教室①」
(講師：舌間 輝吉 多久古文書の村)
6月7日 草場佩川の会総会・講演会
6月13日 公益財団法人孔子の里評議員選定委員会
6月14日 孔子の里ジュニアガイド第21期生入学
6月18日 ゆい工房「本格蕎麦打ち(前期)」
(講師：岸川 和則 塩田津ソバの会)
6月21日 鶴山塾「多久の歴史と文化を学ぶ講座」草場佩川の「山野」善「其の四」
(講師：中尾 友香梨 佐賀大学 教授)
7月1日 鶴山塾「中国古典の扉②」
(講師：武田 耕一 公益財団法人孔子の里 理事)
7月3日 鶴山塾「楽しもう短歌②」
(講師：角本 久子 日本歌人クラブ佐賀県幹事)
7月5日 鶴山塾「古文書教室②」
(講師：舌間 輝吉 多久古文書の村)
7月15日 孔子の里芸能保存会代表者会議
7月17日 職員研修「秋月城下町と秋月博物館」
7月23日 東原岸舎消防訓練
7月24日 孔子の里芸能保存会総会
7月27日 ゆい工房「子ども企画 夏休み☆米粉マフィン教室」
(講師：江頭 美代子 一般社団法人ディーセントワークスサイエティ代表理事・Eris basket 代表)
8月2日 鶴山塾「古文書教室③」
(講師：舌間 輝吉 多久古文書の村)
8月5日 鶴山塾「中国古典の扉③」
(講師：武田 耕一 公益財団法人孔子の里 理事)
8月7日 鶴山塾「楽しもう短歌③」
(講師：角本 久子 日本歌人クラブ佐賀県幹事)
8月7日 多久まつり振興会実行委員会

令和7年度 多久聖廟 秋季秋葉のご案内



日時 令和7年10月26日(日)
場所 多久聖廟

- ① 10時～10時20分 執事・伶人 入場
② 10時20分～10時30分 献官・祭官 入場
③ 10時30分～11時30分 秋葉(せきさい)
④ 11時30分～ 秋葉の舞、参列生徒の唱歌、幼児太鼓、花棒舞、孔子の里腰鼓、孔子の里獅子舞

- 8月30日 鶴山塾「多久の歴史と文化を学ぶ講座」(石井鶴山の奥羽紀行「おくのほそ道」との比較を中心に)
(講師：中尾 健一郎 熊本大学大学院 教授)
9月2日 鶴山塾「中国古典の扉④」
(講師：武田 耕一 公益財団法人孔子の里 理事)
9月3日 ゆい工房「花おはぎ作り」
(講師：林 真由美 和なはアートフード協会 認定講師)
9月4日 鶴山塾「楽しもう短歌④」
(講師：角本 久子 日本歌人クラブ佐賀県幹事)
9月6日 鶴山塾「古文書教室④」
(講師：舌間 輝吉 多久古文書の村)
9月19日 令和7年度第3回理事会
9月22日 秋葉委員会
9月29日 令和7年度第4回理事会

編集後記

年末年始は多久聖廟へ

学問の神様、孔子様を祀る多久聖廟。初詣・合格祈願には毎年多くの参拝者が訪れます。

また、年末は多久聖廟イルミネーションや大晦日は一年の無病息災や家内安全を祈願する「お火たき」が行われます。年末年始はぜひ多久聖廟へお越しください。

- ・多久聖廟イルミネーション
12月15日～1月15日(予定)
- ・多久聖廟お火たき
12月31日 23時30分～翌日0時30分頃
(場所) 多久市物産館「朋来庵」
南側自由広場

本号から新しく編集担当者となりましたが、4月に新しく東原岸舎で勤務するようになり改めて周辺地域の環境の良さを実感しています。中でも聖廟の鶯の鳴き声は本当に美しく、感動さえ覚えます。

西溪公園の寒鶯亭の由来になっている、寒い時期に、鶯は春に向けて一生懸命笹鳴きを繰り返す、その努力の積み重ねによって春には美しい声を響かせる自然の営みのように一生懸命励みなさい、との思いのとおり、特にこの地で鶯たちが上手に鳴き合いながら練習を重ねる様子を聴いていると、この地がいかに学びの場として優れているかを深く感じ取ることが出来ます。

今号では、孔子の里ジュニアガイドの子どものための紹介をしています。子どもたちはガイドをするために教本を勉強し、人前でガイドするため、鶯のように一生懸命に地道な努力を重ねていますが、その努力の成果として、子どもたちが廟内にある石碑の難しい詩文や論語をすらすらと暗記で紹介する様子を見てみるとその実力が得られていることを教えてくれます。(む)

多久の歴史と文化を学ぶ講座

市内外から素晴らしい講師陣を迎え、それぞれの専門的見地から多久を知ることができる講座。
故郷の歴史を学ぶなら、この講座です。気軽にご参加ください。

定員 50人

会場 東原庫舎

時間 13:30～15:00

受講料 500円/各1回

令和8年 1/17 (土)

佐賀藩成立の立役者、 多久安順の時代

戦国大名龍造寺隆信を支えた龍造寺長信の跡を継いだ多久安順は、龍造寺・鍋島氏を支え、佐賀藩の成立に大きく貢献しました。本講座では、龍造寺・鍋島氏を支えた多久安順の活動を追いかけます。

講師

佐賀県立図書館郷土資料調査・編さん課
主事・学芸員 野下 俊樹

11/1 (土)

初期伊万里ビッグバン 磁器の開発と展開

今から約400年前、日本初の磁器が開発され、産業として急速に発展しました。近年、その最初期に多久で生産を試みたことが明らかになっています。佐賀県立九州陶磁文化館の「初期伊万里ビッグバン」展を紹介しながら、多久における磁器開発と展開を中心にお話します。

講師

佐賀県立九州陶磁文化館
学芸員 巖 由季子

令和8年 2/7 (土)

草場船山の政治思想 -「蟋蟀之吟」を読む-

江戸湾にペリー率いる黒船が再来し、日米和親条約が結ばれた安政元年(1854)の末、草場船山は『蟋蟀之吟(しっしゅつのぎん)』という一冊の政治意見を多久家当局に提出しました。本講座では同書を読み解きながら、幕末における船山の政治思想の有り様に迫ります。

講師

佐賀県立九州陶磁文化館
学芸員 芳野 貴典

令和8年 1/24 (土)

草場佩川が見聞した松浦地方の 史話、名護屋城跡、小川島捕鯨

江戸時代後期の儒学者・草場佩川は、文政3年(1820)に多久の儒者仲間とともに松浦地方(唐津領内)を旅し、収集した情報や体験したことを紀行文「松浦古跡 付捕鯨記事」にしたためています。本史料をひも解きながら、佩川が見聞した江戸時代後期の唐津の姿をたどります。

講師

佐賀県立佐賀城本丸歴史館
企画学芸課長 安永 浩

※この講座の事前申込は不要です。受講希望の方は、当日東原庫舎へお越しください。



「東多久駅」(佐賀県佐賀市 野村詩朗)
ふるさと写真コンテスト入選作品



「こわいよー」(福岡県太宰府市 佐藤洋子)
ふるさと写真コンテスト入選作品

多久の
百景